五十年目の 俺たちの旅

校　長　　武井　正明

映画化が決まったと聞いてから、何カ月もずっとこの日を待っていた。
できれば封切の金曜日に、学校を休んで一番乗りで観たかった。しかし、もういい大人だ、というかいい歳だ。初日の夕方学校帰り、パンフレットを買いに映画館に急いだ。

よせばいいのに、ついつい気になって、既に観た映画評論家の「意欲のみ空回りの一本」という手厳しい評価を見つけてしまう。最も怖れていた反応だ…。
過度の期待はよそう。観ない方がいいのか…。いや、あの３人にスクリーンで再会できるだけでも十分じゃないか…揺れ動きながらも、最悪のことも覚悟して、自分に言い聞かせながら、昨日妻と劇場に向かった。
そして観た感想は…

意表を突く出だしの展開に驚き、戸惑ってしまった。しかし徐々に、随時畳みかけるように入ってくる過去の回想場面に、心を揺さぶられる。
映画はいい。ずっと前に亡くなった人も、生き生きとスクリーンで甦る。八千草薫の、時代を感じさせない、圧倒的に美しく切ない演技や、もはや伝説となった、洋子役の金沢碧が映る度に、見ていた当時を思い出す。

今回も、私の心に強く刺さったのは、やはり高校時代に見た、あの回想場面だ。
「お前、人を裏切るってことがどんなことか知ってんのか？…裏切ったことあんのか‼」
いまだに激しく突き刺さっている自分に驚いた。
巨匠、脚本家の鎌田敏夫の言葉は、時代を超越して、今も観る人に響き続ける。
言葉は、人生さえ変えてしまう力をもっている。
あの、カースケ、グズ六、オメダの３人が一緒にスクリーンに映る。五十年の時を経ても当時のまま、ふざけ合う３人…。もはや演技を越え、ドキュメンタリーみたいだった。憧れたんだよなあ、俺にこんな仲間がいたら楽しいだろうなあって…。

最終場面が迫るにつれ、もうこれで「俺たちの旅」とお別れだと思うと、寂しくて堪らなくなり、涙が止まらなくなった。隣の妻にも、あっ、また泣いてるな…覚られた。
映画館を後にする高齢男性のひとりが「年寄りばかりだ」と自嘲気味に呟いていた。しかしこの気持ち、まだまだ失敗の少ない若い人達には、わからないだろうなあ。

自分の人生、いつもどこかに、確かに「俺たちの旅」が、あの３人がいた。
もう、こんな物語に逢うことはないのだろう。
さようなら、俺たちの旅。ありがとう、俺たちの旅。

（関連は「校長 vision」６/６「俺たちの旅」をご覧ください）